

# フィリピン資料館探訪

## ― マニラ及びケソン・シテイを中心に ―

永井 均

### 一、はじめに

筆者は一九九一年一〇月末から一九九二年三月末まで、立教大学派遣留学生として、提携校であるフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学 (Ateneo de Manila University) 大学院に留学する機会を得た。<sup>①</sup> 留学先では、日本占領期研究の専門家であるリカルド・Ｔ・ホセ<sup>②</sup> 国立フィリピン大学助教授 (Mr. Ricardo T. Jose) とリディア・ユー・ホセ<sup>③</sup> アテネオ大学教授 (Dr. Lydia N. Yu-Jose) の御指導のもと、日本軍のフィリピン占領史 (特に日本軍による

比米軍捕虜や連合国民間人の処遇問題)、及び戦争犯罪裁判について研究を進めた。<sup>④</sup> 本稿では、フィリピンに残される、主に日本占領期に関する文書類を所蔵している資料館 (所在地はいずれもルソン島南西部のマニラ、ケソン・シテイ) について、筆者の関心に沿って紹介したい。

### 二、各資料館と所蔵文書

今回訪問し、利用したのは次の資料館である。

国立フィリピン大学管轄下の資料館  
フィリピン国立公文書館  
フィリピン国立図書館

フィリピン資料館探訪―マニラ及びケソン・シティを中心に―(永井)

アメリカン・ヒストリカル・コレクション

アヤラ博物館付属図書室

ロペス記念博物館付属図書室

マグサイサイ財団付属図書室

サント・トーマス大学管轄下の資料館

以下、訪れた順に紹介するが、これらの情報は全て一九九二年三月現在のものであることを予め御断わりしておく。

# ①国立フィリピン大学 (University of the Philippines)

● Diliman, Quezon City

通称をUPといい、フィリピン最初の国立大学である。同大学のディリマン校には、日本占領期の史料を所蔵する三ヶ所の図書館がある。図書館本館(ゴンザレス・ホール)内にあるUP公文書館(四階)、フィリピニアナ・セクション(二階)、そして本館から歩いて七分ほどの所に位置するヴァルガス博物館がそれにあたる。

## (a) UP公文書館 (UP Archives)

開館時間：月～金 (8:00～12:00, 13:00～16:30)

電話：97-60-61 (loc.96)

入館料：ニ〇ペソ (約一〇〇円)

コピー：可(二階)。三五セントボ及び六〇セントボ

(一〇〇セントボで一ペソ)

公文書館は一九七四年六月、時の学長ロペス氏 (Salvador P. Lopez) により「大学発展の歴史を研究する者に素材を提供する」目的で設立され、歴代学長の関連文書をはじめ大学出身者が寄贈した文書が整理されている。③ 図書館一階の入口で入館手続きを済ませ、階段を四階まで上がると公文書館に着く。大変狭い部屋で冷房もない(二階に別室あり)。所蔵史料としては、日本占領下、学長を務めたゴンザレスの文書 (Jose Gonzales Papers) や、戦後に外相を務めたロムロの文書 (Carlos P. Romulo Papers)、ジャーナリストのプライの文書 (Armando J. Malaya Papers)、さらに大戦後、フィリピン人の「対日協力者」を審理した裁判記録 (People's Court Records) などがあげられる。これらは常設の目録で請求し、閲覧・複写も許可されている。校内の移動は「イコット (Ikot)」の愛称で親しまれる校内専用のジブニーを利用するとよい。

## (b) フィリピニアナ・セクション (Filipiniana Section)

開館時間：月～土 (8:00～12:00, 13:00～18:00,

Saturday: until 12:00)

入館料：ニ〇ペソ

コピー：可。公文書館の場合と同様。

二階の公文書館別室に隣接。本セクションには膨大な日本の占領に関する史料が保管されている。大戦中、アメリカ南西太平洋軍司令部戦略局で活動したヘイドン (Joseph R. Hayden) が中心になって収集した「Japanese Occupation Papers in UP Collection」がそれである<sup>(4)</sup>。様々な出版物、法制関係文書、書簡などと共に連合国民間人の収容所関係文書 (“Mimeographed memorandums, notices, administrative orders of the Internee Executive Committee”) も含まれる。同文書群はマイクロフィルム化されているが、オリジナルの閲覧も可能であり、目録の請求番号と署名を規定の書類に記して申し込む (複写も可)。

(c) ヴァルガス博物館付属図書室 (Library, Jorge B. Vargas Museum & Research Center)

開館時間：月～金 (9:00～12:00, 14:00～17:00)

電話：99-50-71 (loc.7407)

入館料：学生五ペソ、その他一〇ペソ

コピー：不可

入口には銃を携帯したガードマンが二、三名いる。彼らにIDと荷物を預け、入館時刻・名前をリストに記載する

史苑 (第五五巻 一号)

ことになっている。日本軍のマニラ占領直後より、比島行政府委員長として対日折衝に当たったヴァルガスが収集した美術品を目にしながら階段を上がると図書室に辿り着く。留学中はいにく閉鎖されていたが、司書のエダン女史 (Ms. Andrea M. Edang) の取りはからいで室内を見るこゝができた。比島行政府文書やヴァルガス宛書簡、『軍政公報』などが保存されているという。しかし、詳細な目録がなく複写も許されていないため、史料収集にはかなりの時間を要すとの印象が強い。図書室の他、館内にはヴァルガスに関する特別展示室もある。

② フィリピン 国立公文書館 (Philippine National Archives)

● T. M. Kalaw Street, Manila.

開館時間：月～金 (8:30～12:00, 13:00～16:25)

電話：521-68-30

入館料：一週間のみ利用は一〇ペソ、一年間の利用は

五〇ペソ

コピー：可。一・五ペソ

本館の起源は一九〇一年設立の「公教育省公文書局」に求められる。一八九八年十二月にパリで開催されたスペイン・アメリカ間の講和会議 (同会議によりアメリカはフィ

フィリピン資料館探訪—マニラ及びケソン・シティを中心に—(永井)

リピンの統治権を獲得)の取り決めの結果、アメリカはスペインの公文書を引き継ぎ、その利用を認められた。本局はアメリカがこれらの文書類を管理する目的で設立したものである<sup>⑤</sup>。現在、「教育・文化・スポーツ省」の管轄下にある。本館は国立図書館の向かって左に位置し、史料保存室及び閲覧室は二階にある。同階で入館料を支払い、所定の用紙に閲覧史料名・署名を記入した後、アーキビストに請求する(目録カードあり)。

スペイン統治時代の文書をオリジナルで閲覧できる同公文書館には、日本占領期関連文書として(一)「戦争犯罪裁判公判記録」と(二)捜査報告書の二点が存在する。前者はフィリピン陸軍主導の対日戦犯裁判記録がほとんどであり、アメリカ軍によるマニラ裁判記録は憲兵隊長であった長浜彰大佐裁判の公判記録のみであった<sup>⑥</sup>。後者は比米軍の戦犯裁判担当当局が裁判前後に収集した、日本兵による戦争犯罪に関する調査報告であり、三〇〇ケース以上の報告書から構成される(比米軍捕虜や連合国民間人収容所に関するリポートも含まれる)。被害にあったフィリピン人からの聞き取りや、日本軍人の尋問調書・作戦記録も綴じられており、興味深い史料である。閲覧室は冷房設備が完備されているが、冷えすぎている場合が多いのでカーディガンが必要。

### ③ フィリピン国立図書館 (Philippine National Library)

● T. M. Kalaw Street, Manila.

開館時間：月～土 (8:00～17:00)

テレックス：40726

入館料：無料

コピー：不可

前身は一九〇〇年設立のアメリカ巡回図書館で、一九二八年に国立図書館と改称された。フィリピン関連図書は五万点を数えるという<sup>⑦</sup>。観光名所リサール公園に隣接し、カラウ・ストリートに面している。昼食時も閲覧可能ゆえ便利である。本館にはケンソン (Manuel L. Quezon)、オスメニャ (Sergio Osmena)、ロハス (Manuel A. Roxas)、及びガルシア (Carlos P. Garcia) など歴代大統領文書が所蔵されている点が特筆に値する(四階のFilipiniana & Asia Division, Rare Book and Manuscripts Room蔵)。

この部屋だけは冷房完備。利用の際、紹介状が二通必要)。ケンソン文書には詳細な目録がある。一八万点を数える同文書群はフィリピン独立前後の比米関係史の分析には不可欠な一次史料である。オスメニャ文書に関しては、彼の自宅が戦争末期に焼失した際、多くの書類が灰燼に帰した<sup>⑧</sup>という事情があり、残されている文書は極めて少ない。現在、ケンソン文書の中に散見されるだけである。ロハス文書はケ

ソン文書のような詳細な目録はないが、書簡や公文書・新聞記事の切り抜きについてカード目録が存在する。

他方、定期刊行物セクション (Serials Section, 四階だが前出の Rare Book Room とは別室) では一九四六年以降の新聞・雑誌が閲覧できる (件別目録あり)。ただ、大統領文書・古い新聞などはコピーが一切許可されていないため、効率的な史料収集は困難な状況にある。

④ アメリカン・ヒストリカル・コレクション (Library, American Historical Collection)

395 Sen. Gil J. Puyat Avenue, Makati, Metro Manila,  
Tomas Jefferson Cultural Center 3F.

開館時間：月～土 (8:00～12:00, 13:00～17:00, アメリカ本国の休日も休館ゆえ注意を要す)

電話：521-7116

入館料：無料

コピー：可。一・二五ペソ (月曜はコピー業務が休み) メトロ・マニラのメイン・ロードである通称「エドサ (EDSA)」をブーヤット (Puyat) で下車 (バスの場合)。少し歩くとトーマス・ジェファーンソン図書館に到着する。入口で来訪者名簿に必要事項を記入し、ガードマンにIDと荷物を預けて通行バッジを受け取りエレベーターに乗る。

史苑 (第五五卷 一号)

アメリカン・ヒストリカル・コレクション (以下、AHC) の図書室は三階にある。

マイロン・コーエン (Myron M. Cowen) は、駐比アメリカ大使への赴任に際して、当時のマニラの主要な図書館が戦災により破壊されていたことを憂い、図書館と歴史博物館の創設を提案した。一九四九年一〇月のことである。

コーエンの提案は、在比アメリカ協会などの支持を得て、一九五一年一月、マニラのアメリカ大使館内にAHCが設立された (一般公開は翌年二月)。AHCは、アメリカ大使と在比アメリカ協会から任命された一二名の歴史委員によって運営され、所蔵文書の中心は寄贈書である (前フィリピン総督のフォーブス〈William C. Forbes〉や元タイ総領事パーキンス〈Eugene A. Perkins〉のコレクションなど)。近年、今日のマカティのビルに移されたこのこと。図書室は大変広く、冷房も適温である。目録も整っており、開架式で利用しやすい。ただ、難点は複写である。コピーは一階のジェファーンソン図書館付属の複写機で係員が行うが、学生で絶えず混雑している。

所蔵史料としては、日本占領下に日本軍により身柄を拘束されていた連合国民間人の記録 (日記・回顧録や自治組織の議事録等) や、軍政当時の新聞 “The Tribune” (完全版)、比米軍ゲリラの新聞 “Leyte-Samar Free

フィリピン資料館探訪―マニラ及びケソン・シティを中心に―(永井)

*Philippines*」などがあげられる。これら文書の他、日本軍と比米軍の戦闘や占領下の市民生活に関する写真が保存されている。

⑤ アヤラ博物館付属図書室 (Library, Ayala Museum)

● Makati Avenue, Makati, Metro Manila.

開館時間：水～金 (8:30～12:00, 13:00～17:30)

電話：812-1193 (loc.36)

入館料：学生五ペソ、その他一五ペソ

コピー：可。ショート・サイズ一ペソ十一〇%、ロング・

サイズ一・二ペソ十一〇%

マカティ・アベニューに面している。博物館は一九六一年一月に設立された非営利団体フィリピンナス財団のプロジェクトの一環として一九六七年四月より公開され、一九七四年六月に現在の位置に移った。展示室には紀元前三世紀から一世紀頃のルソン島北部のカガヤンにおける狩猟シーンにはじまり、一九四六年七月のフィリピン共和国独立までのシーンが人形を使って六〇点ほど整然と展示されている(入場料二〇ペソ)。展示物のうち日本占領期に関するものは六点ほどあった。ただ、当地で聞かれるような日本兵による残虐行為については一切触れられておらず、また比米軍合わせて八千名の死者を出したと言われるバターン

「死の行進」(極東国際軍事裁判判決)についても、「歩行不可能な者は射殺されるか刺殺された」と記す一方で「(日本兵の比米軍捕虜に対する)非人道的な取り扱いが常であったが、日本の監視兵の中には、これら捕虜に対して親切心、或いは思いやりを示す者もいた」とのキャプションに示されている様に、日本人観光客への配慮も印象に残った。

さて、入館して左手奥にある付属図書館は手狭だが開架式書棚ゆえ利用しやすい(蔵書自体は多くない)。本館の目玉は対日講和期に大統領を務めたキリノの文書(Elpidio Quirino Papers)と豊富な日本占領期の写真である。キリノ文書は大統領就任期(一九四八年四月～一九五三年一月)のものが中心。目録で確認し、司書に請求する(別館に所蔵されているので多少時間がかかる)。写真は申請すれば焼き増ししてくれる(一枚三〇ペソ。ネガがなければプラス六五ペソ)。

⑥ ロペス記念博物館付属図書室 (Library, Lopez Memorial Museum)

● Ground Floor, Chronicle Building, Meralco Avenue, cor. Tektite Road, Pasig.

開館時間：月～金 (8:00～12:00, 13:00～17:00)

電話：631-2425/631-2417

入館料：大学生ニ・ニ・ン、その他ニ・ニ・ン

コピー：可。ニ・ニ・ン

「エドサ」をバスで走り抜けロビンソン百貨店前で下車、歩いて二〇分の所にある。特徴あるクロニクル・ビルに入っ  
てすぐ右手が博物館（一九六〇年二月設立）。入館料を払っ  
てから大財閥ロペス家のユーヘニオ氏（Eugenio Lopez）  
が収集した絵画・彫刻を左右に真つ直ぐ進めば図書室に入  
れる。図書室には一六世紀に印刷された書物をはじめ一万  
三〇〇〇冊以上の蔵書がある。また「国民的英雄」リサー  
ル（Jose Rizal）が母や姉妹に宛てた書簡、或いはバタン  
ガス州カラタガン（Calatagan）で発見された一四世紀か  
ら一五世紀頃の古器コレクションもある<sup>(11)</sup>。

しかし、特記すべきことは、図書室のスタッフの尽力に  
より“*Manila Times*”や“*Daily Mirror*”など新聞記事  
の件別スクラップが閲覧・複写可能なシステムになってい  
る点であろう（ただし一九四七年以降のもの）。地下書庫  
に所蔵される一九四五年以降の新聞（製本済み）も貴重で  
ある（閲覧は一階、複写不可）。閲覧室ではアメリカ軍の  
心理戦部隊及び日本軍が作成した宣伝ビラやパンフレット  
も見ることができる（撮影可、一枚一〇〇ペン）。

⑦ マグサイサイ財団付属図書室（Library, Ramon

Magsaysay Award Foundation）

● 1680 Roxas Boulevard, Malate, Manila.

開館時間：月～金（8:00～12:00, 13:00～17:00）

電話：50-20-51 (loc.49)

入館料：無料

コピー：可。ショート・サイズ一・一〇ペン、ロング・

サイズ一・二〇ペン

国立図書館から少し歩いてジプニーに乗り、マビニ・ス  
トリート（Mabini Street）を進み、歓楽街エルミタ  
（Ermita）を通り抜けながら一五分のところで下車。エイ  
ジアン・ライブラリー（Asian Library）の二階にある  
（部屋は手狭で三、四名で一杯）。図書室には三〇万点にの  
ぼるマグサイサイ大統領文書（Ramon Magsaysay  
Papers, 大統領在任期間は一九五三年二月～一九五七  
年三月）が所蔵される。内容は個人電報、書簡、新聞スク  
ラップなどである（カード目録あり）が、日本占領期のもの  
は余り残されていない。ただ、大統領就任期に日比賠償  
交渉が継続されていたため、同時期の文書は戦後日比関係  
史を検討する際の基本史料となろう。これらの文書は一九  
五七年三月一七日に大統領が不慮の飛行機墜落事故で死亡  
した後、暫く未亡人のルツ夫人（Ms. Luz B. Magsaysay）

フィリピン資料館探訪―マニラ及びケソン・シティを中心に― (永井)

の手元に保管されていたが、一九五九年にマグサイサイ財団に移管され今日に至る<sup>⑧</sup>。図書室の利用に際しては、保管担当のハヴィアー女史 (Ms. Nona Javier) 宛てに本人の身分、閲覧目的を記載した書類を事前に作成・提出し、閲覧許可を得なければならない。

⑧ サント・トマス大学 (University of Santo Tomas)

● Espana Street, Sampaloc, Manila.

エスパニア通りに面した同大学は一六一一年に創立された「東洋最古で世界最大のカトリック大学」であり、「聖職者志望の若者のために」設立された。ケソンやオスメンアの出身校としても有名。大学のパンフレットでは、四〇〇年近く存立しているこの大学の学術活動が中断を余儀無くされた出来事として、一八九八年から翌年にかけて闘われたスペインとの革命戦争、そして日本の占領が指摘されている<sup>⑨</sup>。日本占領下では、アメリカ人、イギリス人、オランダ人など「敵国」民間人の収容所として利用された。一九四五年二月、比米軍・日本軍が激しく交戦したマニラ市街戦においても奇跡的に焼失を免れた。同大学医学部は今日でも定評がある。さて、大学には刊行本以外の日本占領期文書はほとんど残されていない。唯一存在するのは連合国民間人収容所に関する史料である。ここでは、その所蔵

機関である二つの文書館を紹介しよう。

(a) レア・ブック・セクション (Rare Book Section)

開館時間：月～土 (8:00～12:00, 13:00～19:00)

入館料：五ペソ

コピー：可。五〇セントガ

図書館三階の館長室でIDと利用申請書を提示し、アパリンシオ神父 (Father Angel Aparicio O.P.) に目的を説明し閲覧許可を得る。案内は同セクション担当のクルス女史 (Ms. Margie S. Cruz) がしてくれる (二階)。ここには、占領下の写真や『抑留者名簿』などの収容所に関連する史料が一部保管されていた。古書の匂いが広がる本室のみ冷房完備。

(b) 大学公文書館 (UST Archives)

開館時間：月～金 (8:00～12:00, 13:00～17:00)

電話：731-31-25

入館料：無料

コピー：可。五〇セントガ

セミナリイ・アンド・チャペル・ビルディング (Seminary and Chapel Building) の四階にある。かつて城壁都市イントラムロス (Intramuros) のキャンパス内に位置していたが、一九二七年に大学が今日のエスパニア



通りに移されてから六年後に、神父邸宅一階に置かれ、のち現在の場所に移された。文書館には一九四一年以降の史料に関して目録がないため所蔵史料の全貌が不明であり、しかも四階の館内への入館が許可されていない点で利用しにくい。管理はパブロ・ヴィヤロエル神父 (Father Pablo F. Villaroel) に一任されており、神父に直接面会し紹介状を手渡し、利用目的を説明して閲覧許可を得なければならぬ。文書は神父が四階の文書館に行って持ってきて下さる。筆者の請求により閲覧できた史料は "Outline of Salient Points; regarding transfer of Santo Tomas Camp to Los Banos" であった。

日本占領期文書以外では、ローマ法皇の大勅書、スペイン王室令、フィリピン総督と司教や教区の間で交わされた公式書簡などのコレクションが所蔵されているという。閲覧は一階の神学部図書室で行い、コピー請求も可能（冷房なし）。

### 三、結びに代えて

以上、筆者が直接利用した資料館について紹介した。管理・整理の面で問題点が多い、というのが全体的な印象である。日本占領期文書や戦犯裁判史料は激しい戦火のもと

焼失したり、或いはアメリカ軍に押収されたりして十分残されているわけではない。これらの「外的条件」に加え、所蔵機関側の資料管理への積極的な働きかけの有無という「内的条件」の作用によっても、史料保存状況の問題点が生じていると思われる。文書管理には古いものであれば、それだけ整理のうえ冷暗所に保管したり、可能であればマイクロ・フィルム化するなど、たえず気を配らなければならない。年平均気温が三〇度を超すフィリピンでは特にその気配りが必要と思われる。ところが、そういった文化遺産を保存していく試みに対して、同国政府の政策中でのプライオリティは低く位置付けられていると感じられた。文書館の目録にエントリーされている史料を請求したところ、出てきたものが大きく破れていたり、"missing" (所在不明) の状態になっていることにはしばしば出くわした経験も手伝って、この印象は日々強まるばかりであった。それと同時に、文化面に十分な経費を注ぎ込めないフィリピンの経済状況をも垣間見た気がした。ただ、おおよそどの資料館でも足さえ運べば誰にでも閲覧の機会が与えられており、しかも各資料館のアーキビストやライブラリアンの方々が親切に対応して下さったことは付言しておきたい。

ところで、当然のことながら、これまで概観したのは数ある資料館の一部にすぎない。この他にも日本の占領に関

連する史料を所蔵している機関として、メトロ・マニラでは①ラウレル記念図書館 (Jose P. Laurel Memorial Library)・なお、ラウレル文書については京都産業大学図書館がマイクロ・フィルム<sup>②</sup>の形で所蔵しているという、②マラカニアン図書館 (Malacanang Library)・③故アゴンシルリョ・コレクション (Library and Collection of late Teodoro A. Agoncillo) などがあげられる (リカルド・ホセ助教によれば②③については個人的つながりが必要などアクセスが困難とのこと)。また、パナイ島イロイロ市の中央フィリピン大学公文書館 (Central Philippine University Archives) には二一七簿冊にわたる日本占領期文書が存在するという<sup>④</sup>。これらの資料館を含め、今後研究の進展にともない各地の資料館の利用の必要性はますます高まってくるであろう。これまでフィリピンにおける日本占領史をテーマとする研究蓄積は、少なくとも日本においては豊富であるとは言えないが、その主要因は史料状況にもあったと思われる。近年、「日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム」(代表：池端雪浦<sup>⑤</sup>、東京外国語大学教授) などによって、当該期の史料収集・聞き取り調査が始められたが、これからも興味のある人に当時の歴史の素材を提供する作業は継続されるべきであろう。

さて、そろそろ本調査報告も擱筆する時がきたようだ。

今回の留学に際しては、各資料館関係者の方々をはじめとして、実に多くの方々から有形無形の援助を得た。とりわけ、フィリピンで生活・研究面の双方にわたり大変お世話して下さったリカルド・ホセ氏、リディア・ユー・ホセ氏、それにアテネオ大学専任講師永井博子さんに對し、ここに記して感謝の意を表したい。また滞在中の下宿先であったアルバレス家 (Alvarez Family) の皆さんからも深い理解と援助を受けた。そして、末筆になったが、留学を勧めて下さった立教大学の栗屋憲太郎教授、藤原彰<sup>⑥</sup> 女子栄養大学教授 (当時)、立教大学大学院の日本近現代史ゼミナールの諸学友をはじめとして数多くの方々から暖かい励ましをいただいたことも記しておきたい。初めて異国の地、フィリピンで生活する自分が無事に留学を全うすることができたのは、偏に以上の方々の助けあつてのことなのである。

# 〔註釈〕

(1) 立教大学とアテネオ大学 (一八五九年創立) とは一九八六年に学生交流協定を締結しており、筆者もこの制度により派遣された。留学生生活状況について関心のある方は拙文を参照されたい。「ケソンだより—フィリピン留学日記—」立教大

学日本史研究会『立教日本史論集』第五号(一九九二年一月)。

- (2) 筆者は当地資料館での収集文書の一部を利用し、一九九三年一月、立教大学大学院に修士論文を提出している(「日本軍による在比『敵国』人の処遇をめぐる——一九四一年——一九四五年——」)。

- (3) Sor.Rita C.Ferraris eds., *Philippine Archives Directory*, Manila, 1991, pp.53~54. なお、公文書館の詳細については拙稿「国立フィリピン大学公文書館」(「東京大学史料室ニュース」第一一〇号(一九九三年一月)参照)。

- (4) ハイトンはアメリカ合衆国領フィリピン副総督、のちにマッカーサー(Douglas MacArthur)の顧問を務めた。一九四五年に死亡するまでフィリピンの戦況について各方面からの情報を収集・編集し、多数の報告書を作成した。この史料そのものが考えられる。See, Thomas Powers, "Balita mula Maynila(News from Manila)", *Michigan Historical Collection's Bulletin*, No.19., Feb. 1971, University of Michigan, pp.18~20. 同論文は大阪市立大学助教授の早瀬晋三氏より提供された。同氏の御好意に記して感謝した。

- (5) Ferraris eds., *op. cit.*, p.40.

- (6) 国立公文書館の他、戦争犯罪裁判関係史料を所蔵している機関は最高裁判所図書館(Law Library, Supreme Court of the Philippines, 9 Taft Avenue, Manila. ☎59-47-87/59-14-54)・陸軍法務総監館図書館(Library of Judge Advocate General's Office, Camp Gen. Emilio Aguinaldo, Cubao, Quezon City) 611-1616 等の調査。

史苑(第五五巻一号)

査では、前者にはアメリカの軍事委員会が行った裁判記録が、後者には第四一軍司令官の横山静雄中将裁判の記録のみが所蔵されていることが判明した。しかし、いずれも欠巻が多く不完全であった。したがって、フィリピンで行われたアメリカの軍事委員会による戦犯裁判記録のオリジナルは、アメリカのメリーランド州にあるワシントン・ナショナル・レコーズ・センターに保管されている連合軍最高司令部(GHQ)の法務局文書で確認しなければならないだろう。なお、日本では国立国会図書館憲政資料室にマイクロ・フィッシュの形で一部閲覧できる。

- (7) 石井米雄監修、鈴木静夫・早瀬晋三編『フィリピンの事典』同朋舎出版、一九九二年、三〇一頁。

- (8) Carolina L.Afan, "A Guide to Philippine-American Relations", *Cultural Research Bulletin*, Vol.1, No.6, June-July 1976, pp.21~22.

- (9) A.V.H.Hartendorp, "The American Historical Committee, 1949-1972", *Bulletin of the American Historical Collection*, June 1972, pp.59-66; A. C.Sabalones, *The American Historical Collection Library: Description and analysis of use*, M.A. Thesis, submitted to the Institute of library science, U.P. (n.d.) pp.13-46. AHC関係の文献については同コンメンの『書』エドウィン・ベナチュス氏(Mr.Edwin B Manarpiis)に煩わせた。記して謝意を表す。

- (10) *Guide to the Diorama of Ayala Museum.*

- (11) Lopez Memorial Museum; Visitor's Guide.

フィリピン資料館探訪―マニラ及びケソン・シティを中心に―(永井)

- (12) Ferraris eds., *op. cit.*, p.78. なお、図書室の蔵書の概要は次の目録を知らむべき。R.M.A.F. Asian Library, *A Guide to the collection of the Asian Library*, Manila, 1991, 284p.
- (13) UST ed., *Political and Royal: University of Santo Tomas*, p.1.
- (14) Ferraris eds., *op. cit.*, p.78.
- (15) 市川誠「サント・トマス大学図書館」『東京大学史史料室ニュース』第八号、一九九二年三月、二頁。
- (16) 吉川洋子『日比賠償外交交渉の研究 一九四九―一九五六』勁草書房、一九九一年、三五一頁。
- (17) Ferraris eds., *op. cit.*, p.68.
- (18) 同フォーラムの成果は『インタヴュー記録 日本のフィリピン占領』(龍溪書舎、一九九四年)として、このほど公刊された。

(立教大学史学専攻後期課程)

### 投稿についてのお知らせ

「史苑」編集委員会では、以下の要領で、原稿を随時募集しています。原稿用紙は四百字詰を一枚とします。

- 一、「研究論文」 五十枚程度
- 二、「研究ノート」 三十枚程度
- 三、「研究動向」 十枚程度
- 四、「史料紹介」「調査報告」 十枚程度
- 五、「会員の論著紹介」「書評」 五枚程度
- 六、「近況、エッセイ」 二枚～六枚

※一～五については審査させていただきます。

※御不明な点は、編集委員会までお問い合わせ下さい。

※原稿の送付先

〒一七一 豊島区西池袋三―三四―一

立教大学史学研究室気付

立教大学史学会

「史苑」編集委員会

電話 ○三・三九八五・二四七九(直)